



江戸時代の池1 完掘状況・東側から

江戸時代の池2 完掘状況・東側から

4. 江戸時代の遺構

池1・2

右近の堀を埋め戻した後に造られた、江戸時代の城主御殿に伴う施設が見つっています。杭と板材で土留を施した池1・2はその代表的なものです。池1は内側が緩い弧を描く逆L字形の池で、池泉式庭園の一部とみられ長さ7.4m×幅6.0m、深さ0.3mを測ります。過去の調査で、この池には東側から竹樋管が伸び、その先端に瓦質管が立てられていたことが判明。池の水を補充する導水路にあたり、一方、東南隅には排水路が付設されていました。池の縁には庭園に使用された大型の石材が据えられていました。

池2は長方形で、長さ16.0m×幅5.3m、深1.0mを測ります。北西にあった井戸から水を引いていたことが分かっています。こちらは単純な形状で池1のような石材もなく、水溜のような機能が推測されます。

5. まとめ

今回の調査では、高山右近期に造られた堀を検出し、それが石垣を伴う障子堀であることが判明しました。高山右近期の堀の具体的構造が判明するのは今回が初めてです。特に障子堀は近畿圏で最古級のものであり、高槻城の中核部分の変遷、さらには中世城郭の発展過程を考える上で貴重な資料となります。

| 西暦(元号) | ことば | 今回発見した遺構 | 平成30年6月公開 | 平成29年6月公開 |
|------------|---|-----------------------------------|---|-----------------------------------|
| 1527(大永 七) | 高槻入江城が文献に登場する | 戦国・和田期の堀 右近期の堀(石垣・障子堀) 池1・2 | 戦国・和田期の堀 今回、右近期の堀と判明 石積み護岸を伴う遺構 今回障子堀と認定 | 右近期の堀 仮設土橋 北内堀・不明門 不明門橋脚 |
| 1568(永禄十一) | 足利義昭と織田信長が上洛。入江氏が従う | | | |
| 1569(永禄十二) | 入江氏が信長に謀殺される。和田惟政、高槻城主となる | | | |
| 1571(元亀 二) | 和田惟政戦死、息子・惟長城主 | | | |
| 1573(天正 元) | 高山氏が高槻城主となる やがて右近城主、城を大改修 天主教会堂やセミナリオ建立、キリシタン墓地形成 | 東内堀 布基礎建物 野井戸 | 今回障子堀と認定 不明門橋脚 | 仮設土橋 北内堀・不明門 不明門橋脚 |
| 1585(天正十三) | 右近、明石へ転封、後に豊臣秀吉が高槻を直轄 | | | |
| 1595(文禄 四) | 新庄直頼、城主 | | | |
| 1600(慶長 五) | 関ヶ原の戦い | | | |
| 1601(慶長 六) | 徳川家康が高槻を直轄 | | | |
| 1615(元和 元) | 大坂夏の陣で豊臣氏滅亡、陣後に内藤信正城主 | | | |
| 1617(元和 三) | 土岐定義城主、公儀修築 | | | |
| 1618(元和 四) | 城下の検地 | | | |
| 1636(寛永十二) | 岡部宣勝城主、岡部期に出丸を増築 | | | |
| 1649(慶安 二) | 永井直清入城、以後廃藩置県まで永井家が高槻藩主 | | | |
| 1874(明治 七) | 城石垣を取り壊して石材搬出、堀・土居跡など耕地化 | 野井戸 | 不明門橋脚 | 仮設土橋 北内堀・不明門 不明門橋脚 |
| 1909(明治四二) | 工兵隊駐屯(1945年(昭和20)終戦、軍隊解体まで) | | | |
| ～現在 | 工兵隊跡地、学校や市民会館など公共施設化が進行 | | | |

高槻城関係略年表

高槻城二の丸跡中央部の調査 現地説明会資料

- 調査主体 高槻市教育委員会
- 調査期間 平成29年9月19日～(調査継続中)
- 調査目的 新文化施設建設に先立つ発掘調査
- 現地説明会 平成31年2月2日
- 調査面積 約6,400㎡

1. 高槻城跡

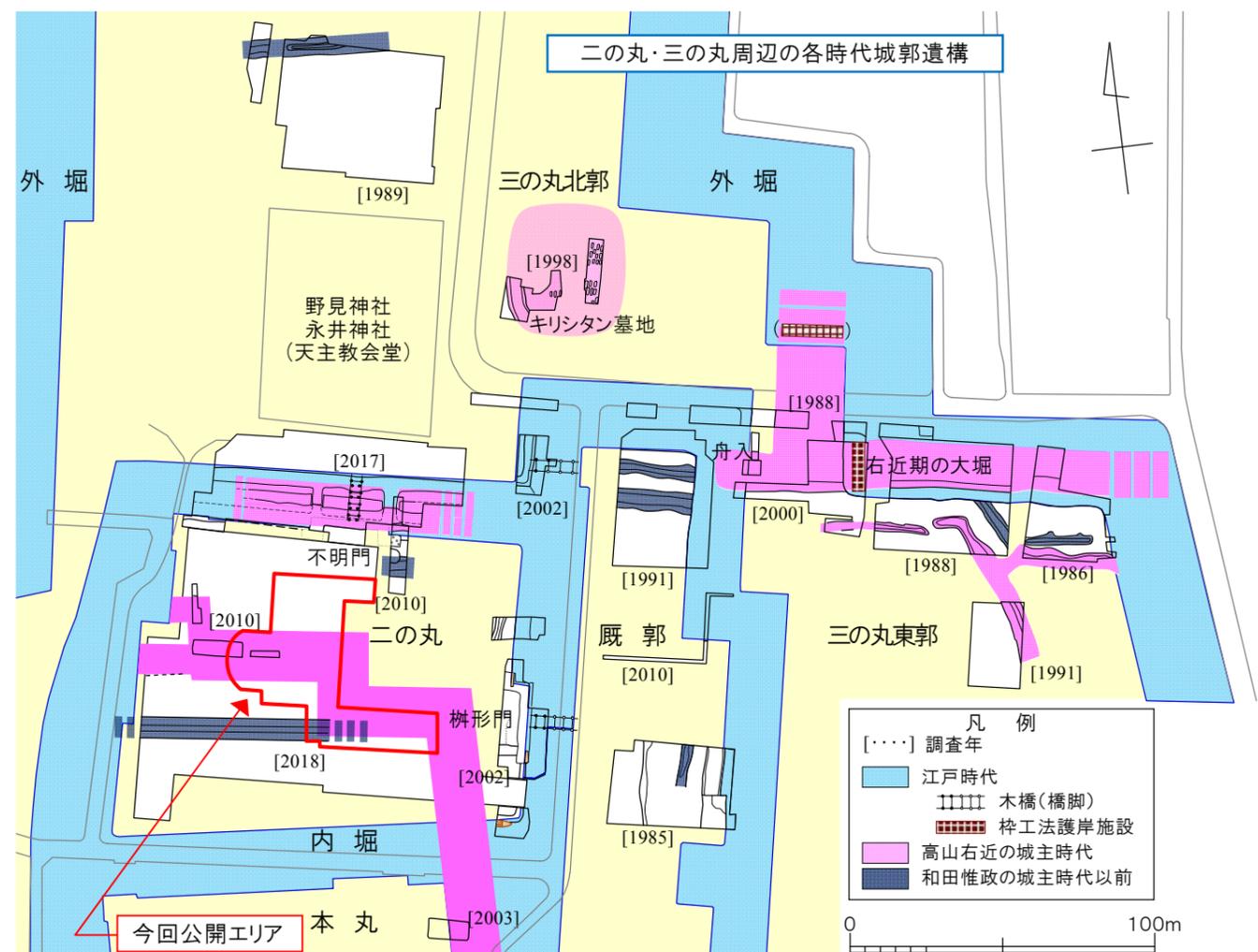
高槻城は天神山丘陵南側の沖積地に位置する平城で、北に西国街道、南に淀川を擁する水陸交通の要衝に位置します。戦国時代の高槻城は、織田信長上洛後、和田惟政やキリシタン大名の高山右近などが城主をつとめた、堀と土塁で囲まれた堅固な城でした。江戸時代の元和三年(1617)に徳川幕府が修築した近世高槻城は、石垣と土居をめぐらせ、天守がそびえる本丸、城主御殿が建つ二の丸、家臣団が住まう三の丸、帯郭、弁才天郭、蔵屋敷などを備えた本格的な近世城郭です。複数の城絵図と現在の地割から、のちに増築された出丸を含めて、全体の規模は東西630m×南北580mと推定されています。

城は明治七年(1874)の鉄道建設に伴って破却され、その後も堀跡の耕地化や工兵隊駐屯などに伴う大規模な改変があり、城跡は大きく変貌しました。

2. 新文化施設建設に先立つ発掘調査

高槻市教育委員会は、高槻城二の丸跡に計画された新文化施設の建設に先立って、発掘調査を実施しています。平成30年6月2日には二の丸跡南西部で現地説明会を実施し、多数の参加者を得ました。

その後の調査の結果、高山右近が造ったとみられる大規模な堀を検出しました。この堀は石垣を備え、近畿で最古級の障子堀であることなど、今まで知られていなかった新たな成果を得ています。





右近期の堀底から検出された障子 東側から



右近期の堀の上端部をめぐる石垣 北東側から

戦国時代の遺構

右近期の堀

幅約16m×深さ約4mの横断形状逆台形の堀を長さ70mにわたり検出しました。これまで断片的に検出した堀と合すると総延長120mを越すとみられます。堀は鍵の手状に少なくとも5回屈折し、現在の大阪府立槻の木高校を囲むようにめぐります。

堀の南側斜面には上端部に石垣が築かれていました。現在は1ないし2段目が残っているだけですが、堀の中へ転落していた石垣石の量から、少なくとも3段は積まれていたと推測できます。構築にあたっては、堀斜面に盛土を施した上に胴木を据えて杭で留め、その上に石材を積んでいます。石材は裏側にこぶし大の礫を詰め込んで安定させていました。石垣の石材は、近辺の川原石を中心に、花崗岩や石灯笼などの転用材も混じえ、大きいもので長辺60cm、小さいもので長辺30cm 前後と大小様々です。水際に腰壁状に石垣をまわし上部は土居を築いていたとみられ、城郭構築に当時導入されたばかりの先端技術を駆使して、右近期高槻城の最重要区画の防御力向上を図ったものと思われます。

堀底は、不規則に方形の穴を掘り込む障子と呼ぶ防御施設で埋め尽くされています。障子内の土の観察から、障子内は泥が溜まっていたとみられます。堀を渡ろうとする敵が障子にはまって動けなくなる、落とし穴のような防御上の機能が想定されます。区画の大きさ・深さを不規則にすることで、泥に埋まった障子がどこにあるか分からなくしているようです。

堀の中からは、漆塗りの椀や土師器の皿が少ないながらも出土しています。石垣石も堀の中から多数見つかっており、堀の埋め戻しにあたって石垣の大半が破壊されたとみられます。注目されるのは、堀内に転落した石材のひとつに「元和三年(1617)」の墨書があったことです。署名した鶴田左平の来歴は明らかではありませんが、石垣を崩し、堀を埋め戻す工事を指図する立場にあった人物とも考えられます。しかし、堀を埋めるに際して、氏名と花押、家紋を記した石材を投棄した事例は珍しく、単なる落書きを堀に落とし入れたものかもしれません。いずれにしても、公儀修築を差配する奉行が同年十二月に着任するに先立って、右近期の堀の石垣取り壊しが始まっていたことを示す重要な資料といえます。



元和三年(六)月(吉)日
鶴田左平
(花押)
(輪違紋)



▲ 右近期の堀から出土した墨書石材と墨書
長さ72.0cm×幅40.5cm×厚さ19.0cm

発掘中の石垣 ▶

この一角では、石垣の前面にも丸太が据えられていた。胴木が前へ迫り出すのを防ぐ工夫とみられる。

